

第十四回南のシナリオ大賞応募作品

ほ
て
ぱ
き

登場人物

栗（17）高校生

松本（45）タクシー運転手

客

《あらすじ》

親子はフクザツでややこしくて愛おしい。熊本は東京、大阪、名古屋などの大都市圏を除くと最も渋滞が多い都市であるそうなの。栞（17）が熊本空港に向かうために乗ったタクシーもまた渋滞に巻き込まれている。タクシーを運転する松本（45）は8年前に離婚したきり会っていないかった栞の父親。栞の母が再婚したことをきっかけに栞は家族とともに海外に移住することになる。栞の母と新しい父親はまだ授業のあった栞を置いてひと足先に東京観光に向かっている。それはもう簡単に会えなくなる栞と松本を2人きりにするために栞の母が考えたこと。松本は栞に餞別を渡す。餞別は「ほてばき」。「ほてばき」。見たことも聞いたこともない。「ほてばき」とは何か？ 「ほて」と「ばき」の2つで1つ。カラーが豊富。すごく伸びる。なんだ？ わからない「ほてばき」。進まない車。埋まらない距離。ある秘密。

栞「その間ずーっとほったらかし」

松本「それは。いや。その」

栞「なに？」

松本「いや。それは。あれだよ」

栞「あれって？」

松本「いやー。あれってのは。そのー」

栞「もういい。てか車。さっきから全然動いてないけど。飛行機間に合うの？」

松本「大丈夫だ。こっちはプロだぞ。言うだろう。阿蘇と渋滞は肥後の華って」

栞「言わないよね」

松本「言わない。言わないけれども」

栞「あのさ。松本さん」

松本「お父さん」

栞「松本さん。もうこの際だから聞いときたいんだけどさ」

松本「あー。成田で待ってんだろ。お母さんと。あいつ。あの。ペロ」

栞「テオ。ね。うん。さっき浅草寺にお参りして。これから空港行くなって言ってた」

松本「どうだ？ オランダ人のパパってのは。
あれだろ？ ベランダでチューリップ育て
たりカステラ買ってきたりすんだろ？」
栞「それオランダっていうより、もう長崎の
イメージだよね」

クラクション。

栞「前。動いたよ」

松本「お。おお」

栞「てゆーか。なんかおかしいなーって思っ
てたんだよね。ずーっと」

松本「なにが？」

栞「なんでお母さん。先にパパと東京観光と
か行くことにしたのかなーって」

松本「そりやお母さんも最後に観光しときた
いって思ったんだろ。今まで仕事ばっ
かでそういうことできなかったから」

栞「私置いて？」

松本「栞は学校あるだろ？」

栞「このためだよね」

松本「さー。なんのー。ことだから。なー」

栞「松本さんと2人にしたかったんだよね。

私を。そうでしょ？」

松本「偶然だろう。偶然お母さんが呼んでたタ

クシーの運転手がお父さんだったっていう。

そういう。なんていうか。キセキ？」

栞「じゃないよね」

松本「じゃない。じゃないけれども」

タクシー無線のノイズ。

栞「いいトコだよ。オランダ」

松本「行ったのか？」

栞「春休みにパパと。家見てきた。海外ドラ

マみたいな家でさ。まあ海外なんだけど。

あそこで暮らすとか昂るわーって感じ」

松本「そうか。よかったな」

栞「たぶんもう日本には戻ってこない。だか

ら。松本さんと私を会わせようって」

松本「お母さんは悪くないからな」

栞「わかってる。だから。最後だから聞けど。松本さん、なんでお母さんと」

松本「あー！ あー！ あー！」

栞「うるさいなーもー。なに？」

松本「そうだった。あれ。饞別（せんべつ）。

買った。買った。これ。ほら。これ」

栞「あー。ありがと。え？ これ」

松本「え？ ダメだったか？」

栞「いや。ダメとかダメじゃないとかじゃない

くて。なに？ これ」

松本「なについて。あれだよ。ほてばき」

栞「え？」

松本「ほてばき」

栞「え？」

松本「ほてばき」

栞「え？」

松本「え？ なに？ 时空歪んだ？ こんな

に伝わらないもの？ ほてばき」

栞「ほ。ほて」

松本「ばき」

栞「ほてばき？」

松本「ほてばき」

栞「なにそれ」

松本「なにそれって。いま栞が持ってるやつ

だよ。ほてばき」

栞「えー。なんでほてばきって言ったいてそんな純粋な瞳で娘を見つめられるの？ てか。ほてばきってなに？」

松本「なについていうかそれだよ。袋の中に2つ入ってるだろ。四角い方がほてで、丸い方がばき」

栞「へー。ほてとばきに分かれるんだ。んなにこれ。めっちゃ伸びるけど」

松本「そりゃそうだよ。だってそれがほてばきだもん」

栞「うわ。ドヤ顔うぎ。え。なんかグミ？ ガム？ みたいな肌感だけ」

松本「あー。確かにな。栞。試しにちよっと食ってみるか？」

栗「食べ物なの？ まーでもそう言われれば

確かにちよつと美味しそう。じゃあ」

松本「おいおいおいおいバカバカバカバカ！

ホントに食うなよ！ 死ぬぞ！」

栗「えー。全然わかんない。その感じマジで

死ぬ感じのヤツじゃん。え？ なんなの？

なんなの？ ほてばき」

松本「ホントに知らないのか」

栗「うん。初めて見たし。聞いた」

松本「はー。ジェネレーションギャップもこ

こまでくると爽快だな」

栗「そういうものなの？ ほてばきって」

松本「確かに一番獲れたのは昭和の中頃で

今はあんまり獲れなくなっちゃって、ちよつ

と前ヤフーニュースで出てたな」

栗「漁で獲ったりするものなの？ てかヤフ

ーニュースになったの？ ほてばきが？」

松本「よし。ここでほてばき豆知識。ほてば

きはハマグリの子殻みたいで2つで1つだ。

組み合わせは世界に1つしかない」

栞「2つで1つ。へー。てかこれ。貝の仲間
なんだ」

松本「ちがう」

栞「違うんだ」

松本「形も色もいろいろでな。色なんか昔は
2種類くらいしかなかったのに今は200
色くらいあるらしい」

栞「増えすぎじゃない？ アンミカなの？」

松本「ホントに知らないのか」

栞「うん。知らない」

松本「なんだよー。営業所で、8年ぶりに会
う思春期の娘になに買えばいいかって聞い
たら全員これって言ってたのに」

栞「そうなの？」

松本「ナウなヤングにバカウケだって言って
たのになあ」

栞「絶対聞く相手間違ってるよそれ。そもそ
もこれ。どこで買ったの？」

松本「ん？ 天草」

栞「天草かあ」

松本「ダメか」

栞「いや。違う。違うよ。天草はいいトコだよ。歴史と文化の薫る町だよ」

松本「だよな。だよな」

栞「でもさあ。年頃の娘になにか買うならもつとあるじゃん。ココサとか行ってさあ。

こんなわけわかんないもんじゃなくて」

松本「わけわかんない！」

栞「あ。いや。そういう意味じゃなくて」

松本「栞。確かにおれはダメだ。クソだ。クズだ。そこまで言うな。ただな。おれのこ

とは嫌いでも。ほてばきのこととは」

栞「お母さん。浮気してたよね」

ウインカー。

栞「してたよね。浮気。お母さん。あの頃」

松本「カナコが。そう言ったのか？」

栞「言わない。言うわけないじゃん。こっちも聞けないし。そんなこと」

松本「じゃあ。どうしてそう思った」

榎「同じ屋根の下で暮らしてるんだよ。隠せることなんてそんなに多くない」

ウインカー。

松本「いやそんなわけないだろ。いやお母さんがそんな。いやそんなわけないだろ」

榎「じゃあなんで離婚したの？」

松本「そりゃあ。あれだよ。あれ。そう。お父さん肥後もっこすで、お母さん薩摩おご

じょだろ？ だからだよ」

榎「どっちも頑固で意地っ張り。ごめんの3

文字が言えない」

松本「ああ。だからその。もつと。その。ちよつとしたことと離婚したんだよ」

榎「ちよつとしたことってなに？」

松本「あー。あれだよ。あれ。あの。イビキがうるさいとか。朝トイレで長い時間新聞読むとか。抜いた鼻毛飛ばすとか」

栞「そんなことで」

松本「離婚すんだよ。そういうのが積もり積もって別れんだよ。たいていの夫婦は」

栞「そういうことじゃなくてさ」

松本「おーおー動いた。あ。ほら栞。飛行機見えたぞ。空港までもうすぐだ」

タクシ―無線のノイズ。

松本「あー。とな。こないだ。ウチに来たよ」

栞「え」

松本「ウチの営業所に来たんだよ。あいつ。

あ。の。ペロがよ」

栞「テオ。そっか。パパ。松本さんところ行っ

たんだ」

松本「あいつはちゃんと知ってたよ」

栞「知ってた。なにを？」

松本「全部だよ。全部。全部だ。カナコが話してくれただって」

栞「そうなんだ。知ってるんだ」

松本「あいつ言ってたよ。カナコとシオリを絶対守るって。永遠に守るって。言ってたよ。何度も。何度も。何度も」

タクシー無線のノイズ。

栞「パパはラブで溢れてるからな」

松本「はん。なにがラブだ。家族ってのはも

っとわけわかんねえヘンテコなもんで繋が

ってんだ。わかってねえよペロは」

栞「テオ」

松本「お母さんは悪くないからな」

栞「そ」

松本「それに。あいつはいいヤツだ」

栞「うん。わかってる」

松本「だから。栞は大丈夫だ。なにも心配し

なくていい。大事にされてる。大丈夫だ」

栞「そっか」

松本「おれが言うんだ。間違いない。大丈夫

だ。栞は。絶対に。大丈夫だ。絶対に」

タクシ―無線のノイズ。

栞「松本さんに言われてもな―」

松本「おい。よし。着いた。栞。先行っていいぞ。荷物。持ってってやっから」

栞「さっきのキリン。なし」

松本「え？ きりん？」

栞「え―っと。き。き。き。切手」

松本「ん？」

栞「きって。次。て」

松本「ああ。しりとりか。て。て。手料理」

栞「り。え―っと。両手。て」

松本「またてかよ。て。て。あ―。テオ」

栞「お―。覚えたね」

松本「なあ栞。飛行機の時間。大丈夫か？」

栞「おとうさん」

松本「おいおいおい待て待て待て待て待て。

栞。栞。このゲームのルール。え。いま

栞「行くね。これ。タクシ―代。またね」

ドアの開閉音。

松本「タクシー代って。これ。ほてじゃねーかよ。またね。か」

携帯電話のバイブ音。

松本「もしもし。おお。いま空港まで送ったよ。別れ際にな。こう、涙浮かべて、お父さん、ありがとう、大好き、愛してるって。うん。言ってる。言ってる。言ってる。違うよ。違うんだ。それくらいの愛情を感じる重厚かつ濃密なへまたね〜だったって。いう話で。カナコ？おい。切るなよ」

ノック。

客「すみませーん。熊本駅までお願いします」

松本「あー。はい。どーぞー」

ドアの開閉音。

客「あ。運転手さん。それ。ほてばきの」

松本「ほてです。お客さん肥後ですね？」

客「ええ。懐かしい。あれ。ばきの方は？」

松本「あー。そのー」

客「まさか失くしたんですか？　すぐに探さな

いと。ほてとばきは2つで1つ。組み合わせ

せは世界に1組しかないんですから」

松本「あー。いえ。大丈夫です。どこにある

かはわかってますから」

客「そうなんですか。なら安心ですね」

松本「ええ。じゃあ。車。出しますね」

客「お願いします。でも不思議ですよ。ほ

てばきって。結局なにに使うんでしょう」

松本「わかりません。でも。ただそこにあれ

ば。それでいいんじゃないですかね」

へおわりへ